

城山短歌会

令和3年夏に公民館主催短歌講座があり、その講座で短歌の楽しさ奥深さにふれ、まだまだ学びたいと思う参加者でサークルとして短歌作りを始める事となりました。

毎月10日までに2首を作り先生に提出するのですが、自分の見たもの聞いたもの、感じた事考えた事などを五七五七七の31文字にのせて、人に伝わるように歌にするのは本当に頭をつかいます。1つの歌に推敲を繰り返し、助詞の一文字に悩み、自分らしさを失わず、何とか2首を提出しています。

月に1回の歌会では、先生のご指導のもと会員どうして批評しあうのですが、自分が一生懸命作った歌が他の人にはどのように受けとめられるのか、不安と期待とドキドキでそれなりの緊張を感じています。時には先生から「宿題です」と言われる事もあります。その歌は題材や目の付け所は良いのに、それを上手に表現できないと宿題で

再提出となってしまいます。皆で楽しみながら、でも真剣に短歌と向き合っています。

日々の生活や季節の移ろい、家族や友人との何気ない会話の中から題材を見つけ、それに自分の感情や思いをのせ人に伝わるように表現する。

- ・季節や自然を感じる
- ・他人や物事と丁寧に接する
- ・自分と向き合う

短歌を始めて、今までの人生であまり意識してこなかった事に目を向けるようになりました。先生のご指導のもと研鑽を積み、サークルメンバー同士で切磋琢磨し楽しく歌を作り続けたいと思っています。

(伊藤 信義)



城山朗読の会

人の大切な感覚器官のうちで、高齢化につれて最初に衰えが来るのが、「聴覚」かもしれません。その「聞く能力」を幾つになっても維持できれば嬉しいですね。「城山朗読の会」は、耳の機能維持にも良いとされる「一生懸命に聞くことに励んでいる会」なのです。

朗読って朗らかに読むんじゃないの？と疑問を持たれた方、流石です。普通はその通りなんです。朗読の会は、毎月第2と第4の水曜日午後の定例会で、安弘美先生のご指導のもと、様々なジャンルの文学作品をテキストにして読んでいます。でも、多くの時間は自分が声を発しているより、他の方や先生のお声を熱心に「聴いている」んです。微妙なイントネーションの違い、アクセントの位置、トーンの高低、ボリューム等これほどまでに声を発するのに意識しなくてはならないことが多いのか、と驚きながらも。朗読の奥の深さを実感すればするほど、朗読の楽しさにハマってしまう

我々です。貴方のご参加お待ちしております。

【これまでに取り上げてきた主な作品】

「蜘蛛の糸」芥川龍之介、「詩画集 鐘の鳴る道」星野富弘、「清兵衛と瓢箪」志賀直哉、「マッチ」永井龍男、「雪女」小泉八雲、「手袋を買いに」新美南吉、「晩秋」山本周五郎、「人形」小林秀雄、「髪かざり」山本周五郎 等々

(伊藤 信義)

